

---

# 私立スマ村学園

ユキーナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私立スマ村学園

### 【Nコード】

N2835W

### 【作者名】

ユキーナ

### 【あらすじ】

ある日対戦に飽きたマスターとクレイジーがある星にスマ村という村を造り私立スマ村学園という学校を造りました。ファルコン家を中心としたドタバタ学園コメディ！。

## キャラクター紹介

↑キャラを紹介↑

マスター：私立スマ村学園の創立者であり校長。温厚な性格ではあるが変わりもので有名。

クレイジー：スマ村学園の教頭。おもしろい事が大好きでめんどくさがり。

### 《ファルコン家》

ファルコン：スマ村学園の体育の先生。ファルコン家の大黒柱で責任感が強く優しい父。たまに失敗するが持ち前の明るさで乗り切る。

サムス：科学の先生で小等部で理科も教えている。家事全般をこなす美人ママ。普段は優しいがキレると家事を放棄する。

リンク：スマ村学園の高等部に通う高校生。お菓子作りが得意で優しい剣士。ゼルダの事が好きだがまだ告白していない。

シーク：高校生。姿は全然違うがゼルダの分身。裁縫が得意。もの静かで大人っぽい印象だが腹黒い一面も。密かにリンクの恋を応援している。

ゼルダ：高校生。天然でおっとりしたハイラルの姫。美人。ゼルダもリンクが好き。平和主義者。ピーチとデイジーと仲良し。

ダークリンク：高校生。リンクの影が実体化した青年。美人が大好きでよくゼルダにちょっかいをだし、そのたびにリンクと喧嘩にな

る。

アイク：高校生。グレイル傭兵団の団長。マルスとロイと仲良し。無口だから無愛想に見えるが面倒見の良い頼れる兄貴。剣術使いでもある。

マルス：高校生。アリティア王国の王子。可愛い顔をしているが男間違ってても『可愛い』なんて言うてはいけない言ったら最後…。女顔がコンプレックス。小悪魔で毒舌。

ロイ：高校生。フィレ家の公子。身長と体格がコンプレックス。純粹で信じ込んだら疑わない。思った事をすぐに口に出してしまう。ちよつと子供っぽい印象。兄のリンクを尊敬。

ピット：スマ村学園の中等部に通う中学生。天使の羽を持つ少年。見た目は天使だが、性格は小悪魔。ちよつぱり寂しがり屋の一面も。兄のシークを尊敬。

ネス：スマ村学園の小等部に通う小学生。PSIを持つ少年。チビツコのリーダー的存在。頭もいい。大人っぽい一面も。

リユカ：小学生。チビツコ。スネーク家のトレーナーと仲良しでよく遊んでる。礼儀正しくちよつぱり甘えん坊。

カービィ：小学生。チビツコ。星の戦士。なんでも食べる雑食。やんちゃで元気。メタナイトとヨッシーと仲良し。ファルコン家のマスコットの存在。

ポポ&ナナ

小学生。チビツコ。双子の兄弟でいつも一緒。二人とも仲良し。や

んちゃんな頑張りやさん。

## 《マリオ家》

マリオ：Mr. Nintendo。国語の先生。ピーチの夫。気さくで明るなおさっん。髭が特徴的。Dr. マリオとして保健の先生もやっている。

ピーチ：キノコ王国の姫。家庭科の先生。マリオの嫁。明るく優しいが怒ると怖い。マリオも頭があがらない…。ゼルダとデイジーと仲良し。

ルイージ：マリオの双子の弟。数学と算数の先生。デイジーの恋人。兄のマリオと違って内気な性格。怖がりでお化けが大の苦手。

デイジー：サラサランドの姫。スマ村学園の中にある保育園の先生。ルイージの恋人。優しくハッキリした性格。ゼルダとピーチと仲良し。お花が大好き。

ワリオ：地理の先生。トレジャーハンターとしても活躍。変態で下品だがおもしろいおさっん。クッパとガノンドルフとデデデの4人でよく飲み会をする。

クッパ：スマ村学園の警備員。亀族の大魔王。ファルコン家が好きでよく遊びに行く。いつの間にかチビッコの遊び相手に…。たまに仕事をサボることも…。

クッパJr.：小学生。クッパの息子。イタズラ好きでよく先生達にイタズラをしては、マスターに注意されている。ドンキー家のデューディーと仲良し。

ヨッシー：マリオ家のペット。カービイと同じくなんでも食べる。それゆえカービイと気が合う。また背中に乗る事もできる。

#### 《スネーク家》

スネーク：外国語の先生。スネーク家の大黒柱。ファルコンと仲良しでよく一緒にお酒を飲む。主に『父さん』、『親父』と呼ばれている。

トレーナー：中学生。本名はレッド（仮）。みんなは彼をトレーナーと呼ぶ。料理から洗濯、掃除となんでもこなすスネーク自慢の息子。ファルコン家のリユカと仲良し。

フォックス：高校生。いつも冷静沈着で勇敢。成績も優秀。いつもファルコと一緒にいる。

ファルコ：高校生。クールを気取っているが実は仲間を大事にする熱血漢。フォックスとは気が合い常に一緒にいる。

ウルフ：高校生。群れるのが嫌いによく1人で行動する一匹狼。よく授業を抜け出して屋上でサボっている。そしてよくマスターに注意されてる…。

ピカチュウ：小学生。スネーク家のペット。いったて穏やかな性格でサムスによく懐いている。ガノン家のピチューと仲良し。

#### 《ガノン家》

ガノンドルフ：PTAの会長。見た目は恐いが優しいおさっくん。よく差し入れを持ってファルコン家に遊びに行く。

デデデ：スマ村学園の用務員。プププランドの自称大王。カービイ

を気に入っているためよくファルコン家に遊びに行く。家事は部下達にはばやらせている。

ロボット：高等部で物理を教えている。穏やかな性格。わかりやすい授業をする。片言で喋る。

ピチュー：保育園生。ガノン家のペット。元気でやんちゃな性格。スネーク家のピカチュウとルカリオ家のリオルと仲良し。

### 《ルカリオ家》

ルカリオ：保育園の先生。いつもは冷静沈着だが弟のリオルが絡むと有り得ないくらいのブラコンになる。

メタナイト：剣術道場の師範。よくアイクとカービィと手合わせをしている。カービィには甘い。剣術道場は趣味の一環としてやっている。

ミュウツー：ミステリアスな性格。口は悪いが良いやつ。ルカリオのブラコンさに呆れている。

リオル：保育園生。お兄ちゃんのルカリオが大好き。ピチューと仲良しでよく遊んでいる。

### 《プリン3姉妹》

プリン：小学生。歌が大好きでアイドルを夢みる女の子。

プクリン：中学生。素敵な恋を夢みる女の子。優しくしっかり者のお姉さん。プリンの姉。

ププリン：保育園生。明るく元気な女の子。保育園の人気者。プリ

ンの妹。

### 《ドンキー家》

ドンキー：農家のゴリラ。畑で穫れた野菜や果物は学校の給食に使われている。

ディディー：小学生。チビッコ。ドンキーと仲良し。元気で明るいが少し寂しがり屋。マリオ家のクッパJr.と仲良し。

### 《オリマー家》

オリマー：生物の先生。ピクミンの主人的存在。花を育てるのが趣味。生物の先生の傍らツリーハウスで洋菓子店を営んでいる。

ピクミン：5色いてオリマーのペット的存在。よくオリマーやG & Wのお手伝いをする。

Mr. G & W：学園の給食係り。平面世界の住人。片言で喋る。穏やかな性格。

### 《ソニック家》

ソニック：中学生。真っ直ぐな性格で曲がった事が大嫌い。足の速さでは学園一速い。

シャドウ：高校生。ソニックと瓜二つ。クールを装っている。カオスエメラルドの力で瞬間移動もできる。学園で2番目に足が速い。

テイルス：小学生。温厚な性格。メカニックに詳しい。ソニックの相棒的存在。



エミー：中学生。自称ソニックのガールフレンド。元気で明るいムードメーカー。さらに勝気で行動力抜群。ソニックはしつこいと思っ  
ている

ナックルズ：高校生。ソニックのライバルでありケンカ友達。一生本気で真面目な性格。

ジェット：中学生。ソニックをライバル視している。プライドが高く、負けず嫌いな性格。ボードが得意

#### 《ベクター家》

ベクター：カオティクス探偵事務所所長。喧嘩っ早く、口が悪いが情にもろく、仁義に厚い。頭脳明晰。

なぜかファルコンとスネークと気が合う。チャーミーの一応保護者でもある。

エスピオ：高校生。カオティクス探偵団のご意見番にて忍者。冷静かつ物静かな性格。

チャーミー：小学生。カオティクス探偵団のムードメーカー。お調子者でおちょこちよい。遊ぶのが大好き。

#### 《その他》

タブー：年齢不明。性格不明。マスターとクレイジーに対抗してタブー学園を造った。

リン：高校生。FEのキャラ。転校生として登場。本名はリンデイスで通称、リン。勝気でさっぱりとした性格。アイクの事が好きになる設定。

## キャラクター紹介（後書き）

書いてみたら中学生が少ないことが分かったので、増やしてみました。

## 新生活スタート!!

ある日、マスターとクレイジーが対戦を終えたスマブラメンバーを呼びました。

マスター『皆さん、お疲れ様です。お呼び立てしてすみません。実は皆さんにお願いがありました…』

クレイジー『お願いと言っても決定事項だな…』

ファルコン『お願い？決定事項？なんだ？』

マスター『お願いというのは、この星にスマ村という村を造ったのですが…そこに住む人がまだいないのです。そこで、皆さんにこのスマ村に住みスマ村学園に通っていただきたいのです。』

サムス『家とか家族構成はどうなるの？』

クレイジー『家は用意できてる。家族構成と職業も俺達が決めておいた。』

と言ってクレイジーは家族構成と職業が書かれた紙を見せた。

紙にはこう書かれていた。

<ファルコン家>

父：ファルコン 体育教師

母：サムス 科学の教師兼理科の先生

息子：リンク 高校生

息子：シーク 高校生

娘：ゼルダ	高校生
息子：ダークリンク	高校生
息子：アイク	高校生
息子：マルス	高校生
息子：ロイ	高校生
息子：ピット	中学生
息子：ネス	小学生
息子：リユカ	小学生
息子：カービィ	小学生
息子：ポポ	小学生
娘：ナナ	小学生

<マリオ家>

夫：マリオ	国語教師兼保健の先生
嫁：ピーチ	家庭科教師
ルイージ	数学教師兼算数の先生
デイジー	保育園の先生
ワリオ	地理の教師
クッパ	学校の警備員
クッパJr.	小学生
ペット：ヨッシー	

<スネーク家>

父：スネーク	外国語教師
息子：トレーナ	中学生
息子：フォックス	高校生
息子：ファルコ	高校生
息子：ウルフ	高校生
ペット：ピカチュウ	小学生

<ガノン家>

ガノンドルフ

P T Aの会長

デデデ

学校の用務員

ロボット

物理の先生

デデデの部下達

ペット：ピチュー

保育園生

<ルカリオ家>

ルカリオ

保育園の先生

リオル

保育園生

メタナイト

剣術道場の師範

ミュウツー

<オリマー家>

オリマー

生物の先生

ピクミン

給食係

M r , G & a m p ; W

給食係

<ドンキー家>

ドンキー

農家デイディー

小学生

<ソニック家>

ソニック

中学生

シャドウ

高校生

テイルス

小学生

エミー

中学生

ナックルズ

高校生

ジェット

中学生

《ベクター家》

ベクター

カオティクス探偵事務所所長

エスピオ

中学生

チャーミー

小学生

<プリン家>

プリン

小学生プクリン

中学生ププリン

保育園生

以上

マスター『どうでしょうか…?』

サムス『私はこれでいいわ』ファルコン『俺もいいぞ!』

ソニック『OK!! 楽しくなりそうだぜ』

アイク『……別に俺はなんでもいい……』

マルス『僕もいいよ』

ガノンドルフ『なぜわしらの所は親父ばかりなんだ??』

それに対してマスターはニッコリ微笑みながら『決定事項です。文句ありますか?』と言いました。

その微笑みはある意味怖かったので、ガノンドルフは『いいえ、ありません』と答えた。

その時、みんなは『決定事項なら聞く必要ないじゃん……』と思っていた。

クレイジー『みんな、良さそうだからみんなの家の地図渡すわ』

と言って地図を渡した。

ファルコン家は、地図のとおり進んでいくと、三階建ての一軒屋の家の前に着いた。

ファルコン『ここか？』

サムス『地図だどこよ』

ポポ&ナナ『今日からここに住むの？』

ゼルダ『ええ、そうですよ。嬉しいですか？』

ポポ&ナナ『わーい！！やったー』

ゼルダ『それはよかったです』

アイク『……それはそうと早く中入ろう……』

ファルコン『ああ、そうだな』

といった感じでファルコン家の人達は家に入っていった。

続く





## 部屋争奪戦

家に入ったファルコン家の人達は部屋割りをすることにした。

マルス『僕は一番広い部屋がいいな…王子だしね!』

ロイ『ずるゝい、僕も広い部屋がいい』

マルス『僕、王子なんだし当たり前』

ロイ『そんな理不尽な事ないよ』

アイク『…俺は日のあたりがいい場所ならどこでもいい……』

ピット『マルスもロイも子供だね…』

マルス・ロイ『お前には言われたくない!!』

ピット『だって僕、部屋なんてどこでもいいもん』

マルス『この僕を子供扱いするなんて…もう許さん』

『ああー、マルス怒らせちゃった(汗)僕知らない』と言ってロイは後ずさりをして逃げました。

怒ったマルスは腰にさしてある剣を抜きピットの前で構えました。

マルスが剣をピットに振り翳そうとした時、サムスがその剣を素手で掴み止めました。

サマス『マルスやめなさい、ピットも人が言われたら嫌な事は言わないの』

ファルコン『ハッハッハッハ、喧嘩はダメだぞ！』

マルス・ピット『はい』

アイク『…結局、部屋割りどうする……』

リュカ『僕、ネスさんと一緒の部屋がいいです…ネスさんいいですか？』

ネス『いいよ』

ポポ『ポポ、ナナと同じ部屋がいい』

ナナ『ナナも』

サマス『はいはい、リュカとネス、ポポとナナは決まりね』

ゼルダ『私は、2階の部屋が良いですわ、よろしいでしょうか？』

リンク『僕は、構わないよ。僕も2階の部屋がいいな』

ダークリンク『じゃあ、俺も2階』

シーク『じゃあ、僕も2階。ゼルダとダークリンクが一緒の階だと心配だしね』

ダークリンク『なんだとおー』

シーク『フフッ』

カービィ『ポヨ、僕1階がいいポヨ』

結局話し合いの結果こうなった

1階

ファルコン・サムス

リュカ・ネス

ポポ・ナナ

カービィ

2階

リンク

ゼルダ

シーク

ダークリンク

3階

アイク

マルス

ロイ

ピット

おまけ

スネーク家がたどり着いた家 赤い屋根の2階建ての家

マリオ家がたどり着いた家 青い屋根の2階建ての家

ガノン家がたどり着いた家 デデデ城（立て直された）

オリマー家がたどり着いた家 森の中にあるツリーハウス

プリン3姉妹がたどり着いた家 高級マンションの一角（家賃は全てマスターが負担）

ドンキー家がたどり着いた家 畑が近くにある平屋の一軒家

ソニック家がたどり着いた家 黄色い屋根の3階建ての家

ベクター家がたどり着いた家 カオティクス探偵事務所（マスターが勝手に持って来た）

マスターとクレイジーは高級住宅に住んでいるとか…

転校生の予定のリンはマンションで1人暮らし

終わり。

## 部屋争奪戦（後書き）

ツリーハウスいいなー。一回住んでみたい！！

## マスターとクレイジーの訪問

ピーポーン、ピーポーン

サムス『誰か来たわ、あなた出てきて』

ファルコン『ああ、わかった』

ガチャ

そこには、人の姿をしたマスターとクレイジーがいた

ファルコン『なんだ？マスターとクレイジーか、とりあえず入ってくれ』

マスター『はい、ではおじゃまします』

クレイジー『おじゃま』

サムス『マスター、クレイジーいらっしやい。今お茶いれるわね』

ファルコン『それで、どうしたんだ？』

サムス『お茶どうぞ』

マスター『有難うございます』

クレイジー『サンキュー』

さっそくマスターとクレイジーはお茶を一口飲んだ

マスター『お部屋は片付いたかと思ひまして、必要なものがありましたら言つて下さい。用意しますから』

ファルコン『とりあえず、子供達のベットと机セットかな』

クレイジー『カタログあげるから、見て欲しい物決めろ』

ファルコン『わかった』

と言つてファルコンは階段に行き子供達を呼びに行きました

ファルコン『おーい！みんな、集まってくれ』

と言つと子供達はすごい勢いで下りてきました

ロイ『どうしたの？お父さん』

ファルコン『カタログもらったから、欲しいものを決めてくれ』

みんな『はい！』

ペラペラ、ペラ

ポポ『ポポ、この2段ベット欲しい！！』

ナナ『ナナはね、このお人形さん欲しい』

マルス『僕、このベットがいい』

サムス『シーク、メモとって』

シークはコクンと頷いてスラスラとメモをとり始めた

ロイ『3DS』 ピット『Wii』 アイク『…このベット…』  
カービー『PSP』 ゼルダ『ファクション雑誌』 ダークリンク  
『iPod』  
マルス『マンガ』 リンク『テレビ』

シークがメモを書き終え、メモを見たファルコンが『おい、ちょっと待て何だこれ』と言った

#### 「メモ」

- ・ベット 9
- ・2段ベット 2
- ・机セット 13
- ・3DS
- ・Wii
- ・PSP
- ・ファクション雑誌
- ・マンガ20冊
- ・テレビ
- ・お人形
- ・ミシン

ピット『何これってただのメモじゃん』

ファルコン『いや、そうじゃなくて何だこの3DSとかWiiって、生活に必要なものだけにしなさい』



ポポ&ナナ『だって欲しいもん』

カービィ『ポヨ。僕も欲しいペポ』

ロイ『3DS』

マルス『マンガ』

ファルコン『困ったな…』

クレイジー『頼んでもいいぜ。全部買ってやるから安心しろ』

サムス『ええー。本当にいいの?』

クレイジー『マスター良いだろう?』

マスター『別に構いませんよ』

クレイジー『じゃあ、頼んどく。たぶん荷物は明日、届くと思うから』

マスター『明日から学校です。中高生になる人は、制服が必要になるので買いに行きますので付いて来てください』

中高生『ハイ』

続く。

## マスターとクレイジーの訪問（後書き）

あれだけのものを全部買うつてマスターとクレイジーつてどんだけ金持ちなんだ…

## お買い物道のりは長い

マスターとクレイジーと制服を買いに行くことになったファルコン家の中高生。

ファルコン・サムス『いつてらっしゃい』 チビッコ達『いつてらっしゃい』

中高生『いつてきます』 マスター『おじゃましました』 クレイジー『じゃましたな』

マスター『途中、スネーク家・ソニック家・プリン家・ベクター家に寄りますので』

みんなを代表して、マルスが『わかった』と答えた

最初にスネーク家に寄った

ピーポーン、ピーポーン

しばらくして、スネークが出てきた

スネーク『どうしたんだ？こんな大勢で』

マスター『あなたの息子さん達をお借りしたいんですが、よろしいですか？』

スネーク『構わないが。今、呼んで来るから少し待っててくれるか』

マスター『わかりました』

スネークはマスターの了解を聞くと子供達を呼びに行きました

しばらくすると、トレーナー、フォックス、ファルコ、ウルフの4人が出てきました。

ファルコ『これから、どこに行くんだ？』

クレイジー『お前らの制服買いに行くんだよ』

ファルコ『ふーん』

トレーナー『リュカはいないの？』

ダークリンク『リュカは小学生だからな』

トレーナー『あ、そっか』

マスター『次プリン家に行きますよ』

今度はウルフがみんなを代表して『ああ』と言った

プリン家にて

ピーポーン

すぐにプクリンが出てきた

プクリン『はい。どうしたんですか、みんな集まって？』

マスター『あなたの制服を買うので付いてきて下さい』

プクリンは『わかりました』と返事をしてマンションを出た

ソニック家にて

ピーポーン、ピーポーン

すぐに嫌々に抱かれるソニックとソニックに抱きつくエミーが出てきた

ソニック『Hey!みんなそろってどうしたんだい?』

クレイジー『お前らの制服買いに行くから、ナックルズとシャドウとジェットを呼んで来い』

エミー『わかった。今呼んで来る』

ベクター家にて

ブー、ブー

しばらくして、寝起きのベクターが出てきた

ベクター『誰だあ?人が寝てたのを邪魔しやがって』

マスター『すみません。エスピオいますか?』

ベクター『エスピオ?いるぞ。呼んで来る』

ベクターはすぐエスピオを呼びに行きました

エスピオ『どうしたのだ皆、集まって?』

マスター『みんな制服を買いに行くのですよ。あなたも付いてきて下さい』

エスピオ『そうか、了解仕る』

続く

お買い物の道のりは長い（後書き）

エスピオの忍者言葉は意外に書きづらい…

女子の制服選びは長い…マルスをもっと…

みんな、集まりお店に着いたマスター達

マスター『これから、皆さんに制服を選んでもらいます。男子の制服はブレザーか学ランのどちらか、

女子の制服はブレザーかセーラーになります。』

ロイ・ピット・マルス・プクリン『はい』

エスピオ『うむ』

アイク・ウルフ・ナックルズ・シャドウ『ああ』

シーク『了解』

ソニック・ジエット『OK!』

リンク・ダークリンク『うん』

トレーナー・エミー『わかった』

ゼルダ『はい』

フォックス・ファルコ『おう』

とそれぞれ返事をして制服を選び始めた

（選び始めて30分）

アイク『…これに、しよう』

アイクは学ランに決まったよう

ロイ『僕も学ランにしよう』

ロイも決まったよう

リンク『僕はこのブレザーにしよう』



リンクも決まったよう

ファルコ『俺はこれにするぜ』

ウルフ『俺も』

ファルコとウルフは学ランに決まったよう

エスピオ『拙者、これにするでござる』

エスピオはブレザーに決まったよう

トレーナーはブレザーに決まったよう

フォックスはブレザーに決まったよう

ダークリンク『やっぱり、俺は学ランだな』

ダークリンクも決まったよう

ソニックは学ランに決まったよう

学ランを着ているソニックを見てエミーは『キャー、ソニックカッコイイ』と騒いでいた

ソニックはそれを無視して更衣室に向かった

ピットとシークはブレザーに決まったよう

ナックルズ『男はやっぱり学ランだろ』

ナックルズも決まったよう

ジェットは学ランに決まったよう

シャドウは学ランに決まったよう

く選<sup>び</sup>始めてから1時間く

マルス以外の男子は全員決まった

マルス『僕は、ブレザーと学ランどっちにしようかな』

アイク『どっちでもいいから早くしてくれ…』

ロイ『マルスく、この制服は？』

ロイが持ってきた制服はベージュのブレザーに青チェックのズボンでした

マルス『うーん、微妙、却下。』

ロイ『えー。せっかく持ってきたのに』

エミーとプクリンが決まったよう

2人はセーラーに決定

ゼルダも決まったよう

ゼルダはブレザーに決定

ピット『マルス、この制服は？』

マルス『却下』

このやり取りがしばらく続き

（1時間30分後）

マルス『決まった』

マルス以外のみんなはグツタリ

マルスがえらんだのは紺のブレザーに青チェックのズボンで青を貴重とした制服

ピット『マルス、制服選びに時間かかりすぎ』

マルス『僕は、王子だから身だしなみを整えるのは当たり前』

それを聞いたみんなは苦笑い

その後、みんなはお金を払い家に帰った

結局、マルスが制服選びに掛かった時間は、トータル2時間30分

終わり。

## どうなる入学式！？ ～前編～

今日は学園の入学式

入学式前、ファルコン家にて

サルス『みんな、急いで準備して』

ファルコン『ハッハッハ。今日からみんな学生か。若いっていいな』

サルス『あら、あなたも若いわよ』

ファルコン『サルスの方が若いぞ』

サルス『あら、あなたったら。ウフフ』

ピット『見てらんないよー。みんなこの2人は置いてさっさと行く』

ゼルダ『置いていくのですか？』

ピットは『うん！ダメ？』とウルウルした瞳でゼルダに聞いた

ゼルダ『はい、ダメです。みんな一緒に行くんです』

ピット『チエツ、やっぱりダメか』

ロイ『ピットにこんな特技が、あったとは…』

アイク『……………』

マルス『どうでもいいけど、早く行こうよ』

ファルコンとサムスはというとまだイツチャついてる

ネス『……………。お母さん、お父さんみんな準備できたよ』

サムス『じゃあ、行きましょっか』

その頃、マスターとクレイジーとガノンドルフは入学式のリハーサル中

司会はガノンドルフ

ガノンドルフ『これより入学式を始める。開式の言葉、クレイジー頼む』

クレイジー『おう。平成〇年、第 回入学式を行っぜ』

ガノンドルフ『校長式辞、マスター頼む』

マスター『クレイジー、本番もそうやるのですか?』

クレイジー『は?』

マスター『は?じゃないですよ。ちゃんとした言葉遣いでやってください』

クレイジー『あれって、ちゃんとした言葉遣いじゃねえの?』

マスター『はい。真面目にやってください』

クレイジー『はぁー、めんどくせえーな』

『何か言いましたか？』と言いながらニツコリ微笑みながら指をポキポキと鳴らすマスター

それには顔が恐いガノンドルフも後ずさりし、クレイジーは慌てて『いいえ、なんでも…』と言った

入学式開始まであと10分、この調子でうまくいくのか……！？

その頃、体育館には入学する子共やその親がたくさんきていたそこにはファルコン家の姿も

受付はミュウツー

ミュウツー『ここに代表者の名前を書け』

ファルコン『ああ』

スラスラ

ファルコンは書き終わるとスネークを見つけスネークの元へ消えた

ファルコン『スネーク、今日からお前のところの子供達も学生だな』

スーネク『ああ。お前のところもだろ』

ファルコン『そうだな。きょうはこの後、宴会だな』

スネーク『いいな！！酒、早く飲みたいぞ』

ファルコン『どうせ、やるならマスター達も呼んで盛大にやろう』

スネーク『いいな』

ちょうどそこにウルフがやってきた

ウルフ『親父は酒のことしか頭がないみたいだな。もうすぐ始まるぞ』

スネーク『なぬ、ちゃんと他の事も考えてるぞ』

ウルフは『どうでもいいけどよ。もすぐだから行くぞ』と言ってスネークを引っ張って行ってしまった

1人残されたファルコンも中へ入ることにした

ガノンドルフ『これより、入学式を始める、開会の言葉クレイジー頼む』

ピット『えー。司会、ガノンドルフなの！？ガノンドルフで大丈夫かな？』

ガノンドルフ『ピット、聞こえてるぞ。大丈夫に決まっておる』

ピット『僕は、無理だと思っけどね』

ロイ『確かに…』

ガノンドルフは『なんだとー』と怒り、司会など忘れてピットとロイに向かって走り出した

ロイ『ガノンドルフが怒った。ヤバイ逃げろ』

ピット『やばい』

と逃げ出す2人、追いかけるガノンドルフ

いつのまにか3人の追いかけてこなくなってしまった

ファルコン『ハッハッハ。あいつ等たのしそうだな』

その言葉を聞いたアイクは『（この人、呑気すぎる…）』と思った

さあ入学式はどうなるのか……

続く





## どうなる入学式！？　　（後編）

入学式中にも関わらず、追いかつけこをする３人

呆れ返る、生徒達とその親達

そして、楽しそうに笑うファルコン

マスターは怒りに震えていた

そして、マスターに我慢の限界が…

マスター『いい加減にしてください。今は、入学式中ですよ。もつと場をわきまえて下さい』

しかし、その３人には、まったく聞こえていなかった

いまだ、逃げているピットとロイ、追いかけるガノンドルフ

マスター『いい加減しろ！！お前ら、入学式中だって言ってるんだろーが』

マスターはさっきより大きな声で言った

それを聞いた一同は啞然。

ピット、ロイ、ガノンドルフは、額に冷や汗が流れていた

その後、マスターはその３人の元へ歩み寄り、『今は、まだ、入学

式中です。静かにお願いしますね』  
とニツコリしながら言った。

ピットとロイは驚きながら、『あ、はい』と言い。ガノンドルフも  
呆気にとられながら『ああ』と言った

マスター『では、入学式の続きを始めましょうか』

全員『はい』

ガノンドルフ『改めて開式の言葉、クレイジー頼む』

クレイジー『平成〇年、第 回入学式を行う』

ガノンドルフ『続いて、校長式辞マスター頼む』

マスター『皆さん、ご入学おめでとうございます。今日から、皆さんは今日からこの学園の生徒になります。勉強に励み、友達をたくさん作り思いやりの心を大事にして下さい。ご家族の皆さん、今日は本当におめでとうございます』

ガノンドルフ『今から、入学生の名前を呼ぶので返事をしてくれ』

ガノンドルフが生徒達の名前を呼び、生徒達は返事をした

この後、まだ入学式が続いたが、みんなマスターがキレた後は誰一人として喋らず静かだった

ガノンドルフ『閉式の言葉、クレイジー頼む』

クレイジー』平成〇年、第 回入学式を終わりとします』

こうして入学式は終了した

続く

## 宴会準備で一騒動

入学式が終わり、ファルコンとスネークがみんなを集めた

ファルコン『みんな集まってもらって悪いな』

みんなはいや別にと言う顔をした

スネーク『実は、俺とファルコンと計画していたんだが、このあと公園で宴会したいと思ってるんだがどうだ？』

サムス『いいわね、楽しそうね』

ベクター『それって、俺らも参加していいのか』

ファルコン『もちろんだ。村の人なら誰でも大歓迎だ』

エスピオ『かたじけない』

チャーミー『わーい 宴会、宴会 って宴会って何？』

それを聞いたみんなは一斉にコケた

ベクター『宴会っていうのはな、お祝い事があった時にみんなで酒や旨いものを食ってお祝いする事の言うんだ』

それを聞いたカービィは涎を垂らしながら『ペポーイ。美味しいものいっぱい食べていいの？』と聞いてきた

それに対してゼルダは『食べても良いですが、皆さんの分も考えながら食べてくださいね』

ダーク『さすが、ゼルダだな。さすが俺の女』

それを聞いたリンクは『俺の女って、ゼルダは誰の女でもないよ』と切れのあるツツコミをいれた

ダークも負けじと『は？ゼルダは俺の女だ。人目あった時からそう思ってた』と言った

それに対しリンクは『それは、君が勝手に思ってるだけでしょ。ゼルダには指一本触れさせない』と言った

ゼルダは今のリンクの一言にトキメキを感じていた

ダークリンクはリンクに対してわざと挑発するように『じゃあ、やってみるよ』と言いながらゼルダの腕を掴もうとしました

がリンクによりそれは阻止され、バランスを崩したダークは近くにいたピーチの上に…

それを見たマリオはピーチがダークに襲われてると勘違いし勢いよくダークに向かっていった

それを見ていたルイージが止めに入る

ルイージはダークに起きた事を全てみていたのです

ルイージはダークに起きた事をマリオに説明し、マリオの誤解をと

いたのですた

マリオ『いきなり、飛び掛ってすまなっかた』

ダーク『別に気にしてねえよ...』

と一件落着

その間、大人達は誰が何を準備するか決めていた

結果…食べ物にはフルコン家とオリマー家が準備することになった

酒はマスターとクレイジー

ジューズはスネーク家

場所確保はガノン家

他の人達はそれぞれお手伝い

ソニック『Wow, it's looking forward to  
o b a n q u e t ! ! 』

テイルス『ソニック、なんて言ったの？』

ソニック『宴会が楽しみだなんて言った』

着々と準備が進んでいた

続く

宴会で大暴れ！？

宴会準備ができた一同

カービー『わーい。宴会 宴会 楽しみペポ』

デデデ『わしも楽しみだゾーイ。お酒が飲めるゾーイ』

マスターとクレイジーが司会

マスター『これより、大宴会を始めたいと思います』

みんな『イエーイ！！』

ゼルダとピーチとデイジーがみんなに紙コップを配る

そしてリンクとシークが子供達の紙コップにジュースを入れて乾杯の準備をする

大人たちはチューハイやビールをクーラーボックスから取り出し乾杯の準備をした

マスター『乾杯の号令はクレイジーお願いします』

クレイジー『待ってたぜ。じゃあ行くぜ、乾杯！！！！』

みんな『乾杯！！』

みんなさっそく飲み始めた



ファルコン『やっぱりビールは旨いな』

スネーク『だよな。やっぱり男はビールだな』

ガノンドルフ『ガハハハ。酒はビールに限る』

マスターは『私も頂くとしましょう』と言ってどこからかワインを取り出して飲み始めた

クレイジーはビールをもらって飲んでいる

カービィはたくさんの料理を前にして、涎をたらしていた

カービィ『もう食べていい?』

サムス『ええ、いいわよ』

アイクは早速、『…肉…』と言ってから揚げを食べ始めた

カービィもムシャムシャ食べている

ファルコが唐揚げを食べようとした時、

ウルフが『お前は食べちゃダメだろ!』と言い出した

ファルコ『はあ?なんでだ?』

ウルフ『お前は鶏だからな(笑)』

ファルコ『俺はニワトリじゃない!!（怒）』

ナックルズ『そう言えば、ジェットお前もじゃね?（笑）』

ジェット『俺はニワトリじゃない、鷹だ!!（怒）』

テイルス『鳥は鳥だから一緒じゃない（笑）』

ジェット『俺は鷹だ!!（怒）』

ナックルズ『はいはい』

マルス『僕、ちょっとトイレ行ってくる』

アイク『ああ』

マルスはトイレに向かった

マルスはすぐにトイレを済ませ戻ろうとした

時にプリム達に声を掛けられた

プリムA『ヒューヒュー君可愛いね。俺らと一緒に遊ぼうよ』

マルスは無視して通ろうとす

するとプリムBが『連れないなあ。またそうゆう所も可愛いね』と  
言ってマルスの腕を掴んだ

マルス『離せよ（怒）さっきから可愛い、可愛いってアンタら誰に

言ってるの?」

プリムC「誰に言ってるのって君だよ」

マルス「僕、男だけど（怒）」

プリムD「またまた。嘘でしょう。まったく可愛いな」

我慢の限界に達したマルスはプリム達を素手で殴った

プリムB「痛てえー。何しやがる」

マルス「何って僕を怒らせるからだよ（笑）」

プリムBは「調子のんなよ!!」と言ってマルスに殴りかかってきた

マルスはそれをヒョツイと交わし、逆にプリムBを蹴り飛ばした

マルス「まさか、今の本気じゃないよね?」

そこにマルスが遅いので心配なつたのかアイクが無表情のまま来た

アイク「…何、やってるんだマルス?」

マルス「ああ、アイク…コイツら僕の事可愛いとか言うから懲らしめてた…」

アイク「（マルスに可愛いなんて言うなんて…なんて命知らずな…）」

プリム達は『きょ…今日は、このぐらいにしてやるよ…』と言って逃げて行った

アイク『（負け惜しみか…）』

マルス『もう二度と僕の前に現れるな！』

マルス『アイク行こう…』

アイク『ああ』

と言って宴会場に戻った

その後は無事に宴会が終了した

終わり。

おまけ

実は、タブー学園も入学式が今日で一部の生徒が宴会に来ていた

そしてマルスに絡んできたプリム達もタブー学園の生徒なのだ

宴会で大暴れ！？（後書き）

マルスが可愛いって言われてもおかしくないと思う…

春が来た（別の意味でも）

入学式を、終えてから数日がたった

アイク『…今日、なんか転校生が来るらしい…』

マルス『そうなの？誰から聞いたの？』

アイク『クレイジー…』

ロイ『どんな子かな！？女の子？男の子？』

アイク『…女の子らしい…』

ロイ『わーい！！やったー。その子可愛いかな？』

アイク『知らん。（ってかどうでもいい…）』

そこにクレイジーが教室に入ってきた

クレイジー『今日は転校生がいる。さあ、入って来い』

ガラッ

と扉が開き女の子が入ってきた

クレイジー『じゃあ、自己紹介して』

転校生『はい。あっ！？』

クレイジー『どうした？』

転校生は『あの人の間に会った！！』と言ってアイクの方を指さした

アイク『…ああ、あの時の…』

ロイ『ええー？アイクあの子の事知ってるの？』

アイク『ああ、この前会った』

クレイジー『なんだ！？お前ら知り合いだったのか？』

転校生『はい。この間、学園の入学手続きしに行こうとしたらタブー学園の連中に絡まれているところをあの人に助けられたんです』

ロイ『やるじゃんアイク。もう少し、詳しく聞かせてよ』

アイク『面倒だ』

クレイジー『いいじゃん。聞かせろよアイク』

アイク『そんな事よりコイツの自己紹介…』

クレイジー『そうだな。だけど後で教えろよ』

アイク『面倒だ。コイツに聞いてくれ…』

マルス『転校生、自己紹介して、後で詳しく聞かせて』

転校生『あ、はい』

転校生『私の名前はリンです。よろしくお願いします』

ロイ『可愛い〜。アイクいいな〜』

アイク『じゃあ変わってくれ…』

マルス『アイクにも春が来たね…』

ゼルダ『リンさん、私はゼルダと申します。よろしくお願いします』

シーク『僕はシーク。よろしくね』

リンク『僕はリンク。よろしく』

ダーク『俺はダーク。よろしくな』

リン『うん。よろしくね』

みんな、それぞれ自己紹介をした

クレイジー『じゃあ席はちょうどアイクの隣が空いてるからアイクの隣で』

リン『はい』

リンは席に着き早速アイクに話しかけた

リン『この間ありがとう。私、リンよろしくね』



アイクは『いや…俺はアイクだ。よろしくな』と言ってフツと笑顔を見せた

この瞬間リンはドキツと胸が高鳴った

クレイジー『リン、ちょっと職員室に来てさっきの詳しく聞かせろよ』

リン『あ、はい…』

ロイ『ずるいー。僕も知りたい』

クレイジー『じゃあ、知りたいやつは全員来い』

シャドウ『フン。くだらん』

エスピオ『まったくでござる』

というシャドウとエスピオだったがやっぱり気になる様でアイク以外の全員は職員室に向かった

そこでアイクがボソツと『…結局、みんな行くのかよ…』と呟いた

続く

やっぱり好きな人の家にあがるのは緊張する…

職員室にて

クレイジー『リン、詳しく頼むぜ!~!』

リン『は、はい』

『さかのぼる事2日前』

入学手続きをしをしようと学園に向かうリン

人気の少ない道を歩いているとタブー学園に通っている(通っているといってもほぼサボっているが…)ブラックプリム達が声をかけてきた

プリム1『ねえ、君可愛いね。俺らと一緒に遊ぼうぜ』

リンは当然シカト

プリム2『おい、シカトかよ』

リンはそれもシカト

プリム2は『おい、聞いてのかよ?』とリンの肩をガシッと掴んだ

リン『ちよつと、離してよ!~!』

プリム3『嫌がる姿も可愛いね。コイツ俺らのアジトに連れて行こ

うぜ

プリム1『いいね。連れて行こうぜ』

リン『ちよつとやだ。離しなさいよ!』

リンが連れて行かれそうになった時にちょうど散歩していたアイクが通りかかった

アイク『おい、そこで何をしている…』

プリム2『何だデメエーは?』

アイク『そんな事はどうでもいい。その娘を離してやれ…』

プリム2は『なんだとー』と言ってアイクに殴りかかった

アイクはそれを軽々と避け、逆にプリム2を蹴り飛ばした

プリム2は星となりどっかに消えた

リン『あの人、すごく強いわ!』

プリム3『おい、コイツヤベエーぞ』

プリム1は『きょ…今日はこのぐらいにしてやる。お、覚えてろよ』  
と言ってリンを突き飛ばした

リンは『キヤー』と言って咄嗟に目を瞑った

アイクは危ないと思い咄嗟に受け止めた

アイク『おい、お前大丈夫か？』

リンは閉じていた目をゆっくりと開いた

目を開いたリンの目の前にドアップのアイクの顔があった

アイクの顔を間近で見たリンは『（この人、強いだけじゃなくて力ツコイイ…）』と思っただけらしくリンは少し赤くなった

アイク『おい、大丈夫か？？』

アイクの顔に見とれていたリン

リン『えっ、あ、うん。ありがとう』

アイク『立てるか？』

リン『あ、うん』

アイク『じゃあ、俺は行くから、じゃあな…気をつけろよ』

リン『うん。じゃあねまたね』

アイクは『ああ。会ったらな』と言ってフツと笑った

その時、リンはアイクに恋に落ちた

リン『（あっ、名前、聞いてない）』

アイクはスタスタと行ってしまった

リン『あの〜名前は？（って行っちゃったし…）』

というわけである

マルス『やるね〜アイク！！』

ロイ『アイクの癖に〜。ずるい〜』

ゼルダ『えらいですね。アイクさん』

シーク『そうだね。なかなかできる事じゃないよ』

リンク『さすが、アイク』

ダーク『面白くなってきた』

ウルフ『フン。男として当たり前だ』

エスピオ『そのプリムとやらは弱いのだな…』

ファルコ『弱いなんてもんじゃない…』

シャドウ『弱いやつほどよく吠えるとはこの事か…』

ロイ『女の子を突き飛ばすなんて最低！』

マルス『それはともかく、アイクにも春が来たね…』

ロイ『リンちゃん。今日、うちに遊びに来てよ』

リン『えっ、いいの?』

ゼルダ『ええ、もちろんよ。是非いらして下さい』

リン『うん』

クレイジー『じゃあ、教室に戻るか』

〈5分後〉

ガラッ

教室に戻るとアイクは自分の机で眠っていた

みんなはアイクを起こして家に帰る事にした

ロイ『アイク、起きろよ。帰るぞ』

アイクは『……ああ』と言って起きた

ロイ『後、今日リンちゃんうちに来るから』

アイク『リンが?どうしてだ?』

ロイ『ゼルダが誘ったんだよ!』

ゼルダ『ええ。そうなんです』

アイク『フーン。じゃあ、帰るか…』

（20分後）

ファルコン家宅前に到着。

リン『あゝ、なんか緊張する…』

アイク『そうか…？（なぜ、遊びに來ただけなのに緊張するんだ？  
…わからん）』

と無表情で思っていたアイクだった

ゼルダ『とりあえず、入りましょう』

みんなはそれに同意して家に入った

続く





アイクの未来のお嫁さん候補：！？

アイク『ただいま…』

学校から早く終わって帰ってきたチビツコ達はアイクの声聞き勢  
いよく玄関まで走ってきた

カービー『お帰りペポ。アイク兄ちゃん、お客さん??』

アイク『ああ』

くみんなはリビングに移動く

ピットも帰ってきていた

ピット『アイク…まさかの彼女??』

それを聞いたリンは少し赤くなった

アイク『違っ…』 マルス『そう、まさかのアイクの彼女なんだく！  
』！』

ピット『えー。マジで…まさかアイクに…』

アイク『だから、違うつて…リンはゼルダの客』

ロイ『そうだよ。アイクにこんな可愛い彼女なんてあり得ない』

ピット『ゼルダのお客さん??？本当ー!??』

ゼルダ『ええ』

ナナ『お姉ちゃんはアイク兄ちゃんの彼女じゃないの??』

ポポ『ロイ兄ちゃん、どっち?..』

ロイ『アイクの彼女じゃないよ。絶対、彼女にさせてたまるか...』

ナナ『ロイ兄ちゃん、お姉ちゃんの事好きなの??』

ロイ『えっ...違っ、違っよ...』

『ただいまー』

ちょうどそこにサムスとファルコンが帰ってきた

サムス『ただいま。あら、お客さん??』

ダーク『そう、アイクの彼女だってさ』

ファルコン『アイクの彼女...ハッハッハ青春だな』

リンク・シーク『本当は違うんだけど...』とボソツと呟いた

アイクはもう諦めたかのようにソファアにドカッと座った

サムス『あなたは名前なんて言うの?..』

リン『はい、リンといいます』

サムス『リンちゃん、うちのアイクをよろしくね』

それを聞いたリンは『えっ、は、はい』と戸惑いがちに答えた

ファルコン『俺からもよろしく頼む』

リンは『は、はい』と言って赤くなった

ダーク『これで、親公認だな…』

ロイ『違う。リンちゃんは僕が連れてきたの』

アイクは無表情で『ゼルダが誘ったはずじゃ…？』と聞いた

ロイ『そ、それは』

アイク『なんでもいいが、リンは俺の彼女じゃない…』

サムス『あら、そうなの？お似合いだと思っけど』

リン『アイクさんはこの間、不良に絡まれてる私を助けてくれたんです』

アイク『リン、アイクでいい。さん付けはあまり好きじゃない…』

ファルコン『さすが、俺の息子だ。えらいぞアイク』

サムス『ええ。偉いわアイク』

ゼルダ『本当に偉いですわ。アイクさん』

マルス『じゃあ、なんでゼルダはさん付けなの？』

アイク『何回かやめてくれって言ったんだが、もう諦めた…』

マルス『そうなんだ』

ダーク『仲良さそうだしっそのこと付き合っちゃえよ』

それを聞いたリンは驚いた

ファルコン『俺達はOKだぞ』

アイクはこの人達に何を言っても無駄だと悟り諦め黙ってしまった

こうしてリンはアイクの未来のお嫁さん候補となった

それを聞いていたロイは泣きそうな顔をしていた

リンは夕食を食べていくことになった

夕食の際にリンはFEの世界にいた時のアイクの話をマルスからいろいろ聞いた

そして帰り際にアイクはリンの見送りをした

アイク『じゃあな。またいつでも来い…』

リン『遊びに行ってもいいの？』

アイク『ああ…』

リンはますますアイクが気になるようになった

終わり。

アイクの未来のお嫁さん候補：！？（後書き）

これからアイクとリンがどうなるか気になります…  
私、ユキーナもアイクが大好きです。

## クッパＪｒ 初めてのおつかい

今日、小等部では、お手伝いという宿題が出された

マリオ家にて

クッパＪｒ、『パパ。お手伝いつて、何すればいいの？』

クッパ『我輩に聞かれてもなあー。マリオに聞け』

クッパＪｒ、『マリオおじさん。お手伝いつて何すればいいの？』

マリオ『うーん、お手伝いね。とりあえず、ピーチに言われた事やればいいんじゃない』

クッパＪｒ、『ピーチ。お手伝い、何すればいい？』

ピーチ『とりあえず、おつかい頼めるかしら？』

クッパＪｒ、『わかった』

ピーチは買い物カゴとメモと財布を用意してクッパＪｒに渡した

ピーチ『メモと財布が入ってるからね。財布落としちゃダメよ』

クッパＪｒ、『わかった』

クッパ『我輩、心配だなー』

クッパＪｒ、『パパ。大丈夫だって僕パパの息子だよー！』

クッパ『そうか、そうか（だが、心配だなー）』

クッパ『じゃあ、いつてきまーす』

マリオ家全員『いつてらっしやい』

ピーチが渡したメモに書かれていた事

にんじん 1本

たまねぎ 2個

じゃがいも 4個

豚肉 300g

クッパ『おつかい おつかい 楽しいな』

クッパ『は最初に八百屋に向かった

クッパ『おじさん。にんじん1本、えっーとじゃがいも4個とたまねぎ2個下さい』

おじさん『はいーよ。全部で400スマだよ（スマ＝円）』

クッパ『は400スマを渡して、野菜が入った袋を受け取った

クッパ『ありがとう。おじさん』

おじさんは『おうよ。これはサービス受け取りな』と言ってりんごをくれた



クツパジャー、は嬉しそうな顔をして『ありがとう』と言った

フーンフーンと鼻歌を歌いながら道を歩きながらりんごを食べるクツパジャー、

次に向かったのはお肉屋さん

クツパジャー、はメモを見ながら注文した

クツパジャー、『おばちゃん。豚肉300g下さい』

おばちゃんは『あいよ。坊やこれ食べる？』と言って試食用ウィナーを見せた

クツパジャー、は嬉しそうに『うん ありがとう』と言った

おばちゃんは『はいよ。お代は食べた後でいいよ』とウィナーを渡してくれた

クツパジャー、『はい』

パクパク

食べ終わったクツパジャー、は『おばちゃんいくら？』と聞いた

おばちゃん『200スマだよ』

クツパジャー、『はい』と言って200スマ渡した

おつかいが終了したクツパジャー、は帰ることにした

帰り道の途中で飴を舐めているディディーと会った

クツパジャー、『その飴どうしたんだ？』

ディディー『ウキッ、ウキーキー、ウキヤ（お手伝いしてもらった）』

クツパジャー、『いいなー』

ディディー『ウキ、ウキ、ウキーキー（お金もってるならそれで買っちゃんよ）』

クツパジャー、『そうだね』

と言って2人で駄菓子屋さんに向かった

クツパジャー、『おばあちゃん。ペロペロキャンディーちょうだい』

おばあちゃん『50スマだよ』

お金を受け取ったおばあちゃんはペロペロキャンディーを渡した

その後もいろいろ買った2人

結局、財布の中身を全部使ってしまった2人

その後、クツパとワリオ意外のマリオ家全員にこっ酷く怒られたクツパジャー、

ちなみにディディーはドンキーにもものすごい怒られてタンゴブもつくったらしい

2人が買ったもの

クッキー

せんべい

ガム

飴

ポテチ

ラムネ

コーラ

とん〇りコーン

マドレーヌ

グミ

などなど…

クッパはちゃんとお買いものができた事に感動したらしい

終わり。

おまけ

ちなみにファルコン家のチビッコ達は掃除のお手伝いをしたらしい  
頑張ったご褒美にリンクがチョコレートケーキを作ってくれたらしい



## デイジーの悲劇

これは保育園の先生をしているデイジーにおきた悲劇

デイジーにはある日課がある

それは毎日、6時〜7時までの一時間の間、ランニングをしていること。そのランニング中に起きた悲劇である

ある日、保育園での仕事を終え家に帰ったデイジー

家に着いたデイジーは着替えてさっそくランニングに行くことにした靴を履いているデイジーの元にルイージとピーチが来た

ルイージ『デイジー、ランニングに行くのか?』

デイジー『ええ』

ピーチ『あまり、無理しないでね!~!』

デイジー『ええ。分かってるわ』

ルイージ『がんばって』

デイジー『うん。いってきま〜す』

ピーチ・ルイージ『いってらっしやい』

家をでたデイジーは水を買ったためにコンビニへ向かった

コンビニ店員『いらっしゃいませ』

デイジーはドリンクコーナーに向かい水を選びレジへ

ピッ

コンビニ店員『テープでよろしいですか？』

デイジー『はい』

コンビニ店員『こちら105スマになります』

デイジーは110スマ払った

コンビニ店員『110スマお預かりします。5スマとレシートの  
お返しです。』

デイジー『レシートはいらないよ』

コンビニ店員『そうですか』

デイジーはコンビニを後にした

去り際に店員が『有難うございました』と言っていたのが聞こえた  
しばらく走っているとメタナイトの剣修行から帰るアイクとカービ  
イの姿が見えた

カービィ『あつ、デイジーだぺポ』

アイク『…本当だ』

デイジー『お疲れ2人とも』

アイク『ああ。デイジーも』

カービィ『頑張つてぺポ』

デイジー『ええ。2人とも気をつけて帰るのよ』

また、しばらく走っていると遠くから『ママ』と呼ぶ声が聞こえた

後ろを振り返ると小さい人影が見えた。

暗くてよく見えなかったので気にせず走っていたら

また、『ママ』と呼ぶ声がした

デイジーはまた振り返ると小さな人影が見えただけだった

今度は前を見たが誰もいない

デイジーは不思議に思いながらも走り始めた

今度は『ママ』と呼びながら人影が近づいてきた

デイジーの前には誰もいない、後ろにその人影

デイジーはあの人影が言っている人物は自分だという事に気が付いた

デイジーはその人影の事を待ってみることにした

そこに現れたのはクツパーだった

クツパー「なんだ、デイジーか。ママかと思った」

デイジー「ピーチと間違えたのね。ジュニアどうしてこんな所にいるの？」

クツパー「学校終わった後、ディディーとサッカーしてたら遅くなっちゃた」

デイジー「こんな、遅くまで遊んでちゃダメじゃない!!」

クツパー「わかった。次から気をつけるよ」

その後、2人して帰った

デイジーには子供もいないし、まだ結婚もしていません

なのにママと間違えられてしまったデイジーの悲劇

おまけ

お買い物事件があつてから、ジュニアにクツパはピーチのことを「ママ」

と呼ばせるようになったらしい理由はよく分からないが…

その際マリオが猛反対したが、意味なく終わった



ちなみにマリオは未だおじさんと呼ばれている  
ルイージもおじさんと呼ばれている  
ワリオはおっさんと呼ばれている

終わり。

## ベクターの一日

カオティクス探偵事務所所長のベクターは暇だったので（いつも暇だけど）散歩をしていた

ベクター『しっかしこんだけ暇だと俺の事務所としては困るぜ』

ナックルズ『よおベクターどうしたんだ？』

ベクター『ああナックルズ、事務所が暇だから散歩をしているんだよ』

ナックルズ『そうか…それは事務所としても大変だろ』

ベクター『そうだよ客が来ないから暇で暇で…』

ナックルズ『まあがんばれまたな』

ベクター『ああじゃあ』

（公園）

ピカチュウ『ピカッピカチュウ！』

ピチュー『ピチュピチュ！』

ベクター『おおピカチュウにピチューどうしたんだ』

ピカチュウ『ピカッピカチュウッ！』

ベクター『ん？あの木がどうしたんだ』 一応言葉は分かっています

ピカチュー『ピカッピカッ』

ベクター『なるほどあの木にピチューの風船が引つかかったんだな』

ピチュウー『ピチュ〜』

ベクター『よし待ってる今取ってくる』

〜木の上〜

ベクター『あともうちよつと…』

バキッ

ベクター『ノアアアアア』

ガンッ

ピカチュウ『ピカッピカ!?!』

ピチュー『ピチュッピチュッ!』

ベクター『いててて…ほら風船取れたぞ』

ピチュー『ピチュ〜ピチュッピチュッ（ありがと〜）』

ベクター『ははっいいってことよ困った時はお互い様だ』

ピカチュウ『ピカ』

ピチュウーピチュ』

ベクター『またなー』

くファルコン家の前く

リンク『あつベクターさん』

ベクター『おうリンクどうしたんだ？』

リンク『実は皆のおやつを作ろうと思ったんですけどガスが故障していたのを忘れてて仕上げのところまで作ってしまったんです』

ベクター『だったら俺に任せろちよつとそのおやつを持って来い』

リンク『えっはい…』

リンク『持ってきました』

ベクター『よしちよつと離れてろいくぜ！』

ゴオオオオオ！

リンク『す…すごいベクターさん炎をはけるんですか！』

ベクター『へへっこんなもんでどうだ』

リンク『色もばっちりですありがとうございます』

ベクター『いいってことよまたな』

リンク『あつベクターさん…行っちゃったせつかく食べてもらおう  
と思ったのに』

ゝ人気のない道ゝ

ベクター『さーてそろそろ帰るか』

プリム1『よおお兄ちゃん俺達にばこされなくなきゃ金よこしな』

プリム2『へへっ痛い目見るぜ』

ベクター『悪いが俺は貧乏なんで金はねえんだよ』

プリム3『だったら仕方ない俺達のストレス発散の相手しろや』

プリム4『へへっいくぜ!』

プリム4が殴りかかろうとしたとき

ベクター『オラアッ!』

プリム4『ブヘエッ』

ベクターは軽くよけて殴り返した

プリム2『てめえ何しやがる』

ベクター『それはこっちのせりふだぜまったく』

プリム1『くそっやっちまえ』

プリム4人がベクターに一斉に飛び掛った

ガンッ

ドンッ

ボカアンッ

ドカアンッ

プリム3『グ…ハッ…こ…こいつ強ええ』

ベクター『おめえらが弱すぎるんだよもっと痛い目見るか?』

プリム1『ひっ…今日の所はかんべんしてやる』

ベクター『おうとつとと帰れ』

プリムは本当に弱い

くカオティクス探偵事務所く

ベクター『まったくあいつら弱いってもんじゃないぜ』

エスピオ『やはり弱いかな…』

チャーミー『よわよわ』

ブー  
ブー

ベクター『ん？誰だ』

そこにはガノン家、そしてファルコン家がいた

ベクター『どうしたんだ？皆そろって』

ファルコン『いやあ今日はベクターのおかげで皆のおやつが食べれたんだよそれでこれはお礼だよ』

カービー『ポヨ美味しかったからおすそ分けペボ』

ベクター『おおありがとう』

ガノン『家のピチューが世話になったからこれをやる』

ピチュー『ピチュウ〜』

ベクター『おおリンゴがこんなに悪いな』

マルス『今日のおやつは王子の僕も好評だよ』

ロイ『美味しかったよ』

アイク『ああ』

サムス『よかったら食べてくださいね』

ベクター『皆すまねえなありがたく貰っておくよ』

ファルコン『じゃあ俺達はこれで』

ガノン『またな』

ベクター『ああじゃあな』

おまけ

早速貰ったお菓子とリンゴを食べるベクター家

エスピオ『この菓子はうまいな』

チャーミー『リンゴもおいし〜』

ベクター『ははいいことするっていいもんだな』

チャーミー『いいこと、いいこと〜』

エスピオ『そうであるな』

ベクター『今日は暇な一日じゃなかったな（笑）』



終わり。

## ベクターの二日（後書き）

弟がベクターが好きなんで書いてみました結構よかったです

落ちているものは食べちゃダメ…

ある日、体育の授業でドッチボールをする小学生、中学生、高校生  
(体育は子供全員で)

マルス『行くぞー、えいつー!!』

マルスが放ったボールはカービィに向かって一直線

余所見をしていたカービィ

ネス『カービィ、危ない!!』

ボーン

カービィ『ポーヨー!!痛いぺポ(泣)』

リュカ『大丈夫、カービィ??』

カービィ『大丈夫ぺポ。でもちよつと休むぺポ』

木陰に向かうカービィ

最初から外野のロイ

ロイ『カービィ大丈夫??』

カービィ『大丈夫ぺポ』

木陰で休みに行くカービィ

木陰で落ちている木苺みたいな実を見つけたカービィは近くにいたロイを呼んだ

カービィ『ロイ、ちょっとこっち来て』

ロイは『ん？何？』と言ってカービィの元へ向かった

さっきの実を見せながら『これ食べていいかな？』と聞くカービィ

『さあ？』と言って首を傾げるロイ

パクッ

カービィはさっきの実を食べてしまった

カービィ『美味しーい！！』

『本当？』と言ってロイも一口でパクッ

ロイ『旨い』

しばらくすると2人の体に異変が…

カービィとロイにネコ耳が生えたのだ

ロイ『カービィ！ネコ耳が生えてる』

カービィ『ロイもポヨ』

『えっ！？』と言って慌てて頭を触り確認するロイ

ロイ『えー！！何だこれー（泣）』

ロイの悲鳴を聞いたみんなが集まってきた

アイクは『どうした？…』と言ってロイの姿を見て言葉を失った

マルス『どうしたのその耳（笑）？』

ピット『ロイ、そんな趣味あったの（笑）？』

ロイ『違ーう！！変な木の実、食べたらこうなったの（泣）』

ゼルダ『ロイさん可愛い〜』

ロイ『そんな事言われても嬉しくなーい（泣）』

ダーク『こりゃ、笑えるぜ』

リンク『そんな事言っなよロイが可哀想だろ』

ファルコン『……………』

リン『どうしましょうか…？』

シーク『とりあえず、Dr.マリオのところに行ってみたら？』

ピット『さすが、シークさん』

ソニック『早くDr. マリオのところに行こうぜ』

みんなでDr. マリオの元へ向かった

Dr. マリオ『どうしました？』

カービィ『木の実を食べたらネコ耳が生えた』

2人からシッポが生えてきた

ロイ『うわぁーシッポまで生えた』

Dr. マリオ『おそらく、2人が食べたのはネコの実だな』

ナックルズ『ネコの実ってそのままじゃん…』

Dr. マリオ『大丈夫！2日たてば自然に治る』

ビヨーン

今度はヒゲが生えてきた2人

シャドウ『ヒゲまで…すごいな』

ポポ&ナナは『シッポ、シッポ』  
『と言いながらカービィのシッポでじゃれていた』

Dr. マリオの診察を受けた2人とみんなはそれぞれ家に帰ることにした

家に着くころには2人は完全に猫になってしまっていた

ロイ『ニャーニャニャ（ただいま）』

アイク『言葉もネコ語…』

サマス『どうしたのロイ・カービィ！？』

ファルコンがサマスに詳しい事を説明した

その後がもう大変

ロイはサマスとゼルダに抱きしめられたり、スリスリされたりとそれは大変可愛がられた、ロイはアイクに助けを求めようとしたがアイクは寝ていて、ダークは羨ましそうにこっちを見て、リンクはおやつを作り、シークは縫いものをしていた

マルスとピットはゲームをしていてファルコンはテレビを見ていた

カービィはポポとナナにオモチャにされ、それを見たネスとリユカは哀れに思っていた

そして2日後、元の姿に戻った2人

2人にとってこの2日間は地獄だったらしい

終わり。

おまけ

スネーク家でもスネークがその実を食べてしまい猫化したらしい

そしてウルフとファルコの2人に散々いじられたらしい



## 全部勘違いから…

ある日、僕が学校から家に帰るとお母さんが怒りながら荷物をまとめていた

僕はお母さんに『どうしたの？』と聞いたが何も答えてはくれなかった

そこで僕は一旦自分の部屋に行きかばんを置いてくることにした

僕がかばんを置いてリビングに戻ると先に帰っていたであろうアイクとロイとマルスがいた

ロイ『あつ、リンクおかえり』

マルス『おかえりー』

アイク『リンクおかえり』

リンク『ただいま。ねえ、お母さんどうしたの？』

ロイ『よくわかんない。父さんとケンカでもしたんじゃない？』

マルス『そうじゃない』

アイク『俺、母さんから聞いたんだけど…』

リンク『うん…どうしたのアイク』

アイク『父さんに浮気されたってさっき母さん泣いてた…』

ロイ『あの父さんが浮気ねえー。あり得ない』

マルス『僕もそう思う。あの母さんにベタ惚れのお父さんが浮気なんかするはずないよ』

アイク『俺もそう信じたいけど…母さんが言うには今日、買い物中に見たんだって…』

リンク『お母さんは何を見たの』

アイク『…父さんが綺麗な女の人と一緒に歩いてるのを見たらしい…』

ロイ『見間違いじゃ…？』

アイク『見間違いじゃないらしい…』

しばらく僕とその3人は考え込んでいた

しばらくしてお母さんが置手紙を置いて出て行ったことに気づいた

お母さんの置手紙にはこう書かれていた

子供達へ

勝手に出て行くことをお許しください

この事が落ち着くまで私はマリオ家にお世話になろうと思います  
何かあったらマリオ家にいますので来てください

私はあなた達をずっと愛しています

しばらくの間さよなら

これを読んだ僕達は呆然と立ち尽くすしかなかった

とそこにゼルダとシークと日直であつたはずダーク、が帰ってきた  
その3人に今までの事を話すとゼルダは泣きながら自室へ行つてしまった

ダークはというと父さんに対して怒りをあらわにし、シークはダークをなだめていた

僕はゼルダを慰めに行つた

今、ゼルダの部屋の前

コンコン

ノックをしたが返事がない

僕は大丈夫かなあとと思い『ゼルダ、入るよ』と言って部屋に入つた

ゼルダはベットに顔をつけ泣いていた

僕が『ゼルダ、大丈夫?』と言ってゼルダに近づくとゼルダは僕に抱きついてきた

リンク『ちよっ…ちよつとゼルダ!?』

ゼルダは『ちよつとだけこうさせて下さい…』と言って僕の胸に顔

を埋めた

（10分後）

ゼルダは落ち着いたのか顔をあげて『もう大丈夫です』と言って微笑んだ

ゼルダの目が少し赤かったので、僕は冷たいタオルを持ってきてゼルダの目を冷やしてあげた

するとゼルダは僕に『ありがとうございます。リンク』と言ってニッコリと微笑んだ

僕は『いや、当然のことだよ』と照れくさそうに言った

（目を冷やし始めて5分後）

ゼルダの目はもう赤くなかったので、リビングに戻る事にした

リビングに戻るとチビッコ達とピットが帰ってきていた

お母さんが出て行ったことを知ったチビッコ達は一齐に泣き出してしまった

アイクは『大丈夫。母さんは帰ってくる』と言ってチビッコ達を慰めていた

それを聞いて少しは安心したのか泣き止んだ

そのとき、事件の発端となったお父さんが帰ってきた

僕がお父さんにお母さんが出て行ったことを伝えるとお父さんは急いでお母さんの元へいそいだ

途中なぜかスネーク家に寄り綺麗な女の人と一緒に連れて行った

くマリオ家にてく

ピンポーン、ピンポーン

すぐにピーチさんが出てきた

ファルコン『サムスはいるか？』

ピーチ『ええ…どうぞ入って』

みんなで中に入った

中に入るとお母さんがいた

チツビコ達はお母さんを見るなりお母さんに飛びついた

お父さんと綺麗な女の人はお母さんの元へ行った

サムス『貴女はこの間、主人と一緒に歩いてた人！？』

綺麗な女の人『ええ。そうよ』

サムス『アナタ、なんでこの人がここにいるの（怒）説明して』

ファルコン『ああ、言っておくが、この人は女じゃないぞ！！』

サムス『嘘つかないで。この人どう見ても女じゃない（怒り）』

綺麗な女の人は『嘘じゃないわ。私は男よ』と言ってマスクをはずした

そこに現れたのはなんとスネークだった…

サムス『えー、なんでスネークがここに？』

スネーク『それは俺があの子に変装していたからだ』

それを聞いたファルコン以外の全員が驚いた

サムス『なんで、そんな格好してたの？？』

スネーク『ああ、極秘任務があつてな。あの時、少しファルコンに手伝ってもらったんだ』

サムス『なんだ？全部私の勘違いだったのねごめんなさい、アナタ』

ファルコン『いや、分かってくれば良いんだ』

と言って仲直りし無事に家に帰ったサムス

おまけ

迷惑をかけられたマリオ家はこの日、ファルコン家の夕食に呼ばれたらしい

終わり。

## スマ村の面白い話 1

### 面白い話 其の1

先日、僕と弟のリュカとカービーでWiiで遊んでいると洗濯物を取り込んで戻ってきたお母さん（サムス）が『あなた達はいいいえ！！毎日がエブリデイで』と言った。  
お母さんはいったい何が言いたかったのだろうか…。

### 面白い話 其の2

先日、放課後の学校で泣いているプリンを教頭が発見。

どうして泣いているか聞くと好きな子に告白したがフラれてしまったらしい。

そこで教頭は慰めるつもりで「人間、顔じゃないぞ」と言う所を間違えて『お前の顔は人間じゃないぞ』と言ってしまった。

その後、プリンが大泣きしたのは言うまでもない。

終わり。



## スマ村の面白い話 1（後書き）

インターネットに載っていた面白い話を（スマ村の人で）再現してみた。

## スマ村の面白い話 2

### 面白い話 其の1

ある日、スネーク家でスネークとウルフが喧嘩をしていた。  
スネークが「バカモノ！」というのを言い間違えて

『バケモノ！』と怒鳴ってしまった。

喧嘩はさらにヒートアップしてしまったのは言うまでも無い。

### 面白い話 其の2

マリオとピーチが2人して朝寝坊してしまい、急いで

お弁当を作っているピーチに『おかずは、気持ちが入っていればなんでもいいよ』

といったら、お弁当の中が全部キムチになっていた。

### 面白い話 其の3

弟のルイージは頭が痛くなると、氷でおでこを冷やします。

先日も夜中になんか痛みがひどくなり、フラフラしながら台所へ。

冷凍庫からあらかじめビニール袋に入った氷を取り出しおでこに乗せ眠りました…。

翌日、心配になった僕がルイージの部屋に入るとルイージのおでこに解凍されたイカが乗っかっていました。

終わり。

## スマ村の面白い話 2（後書き）

これはインターネットに載っていた面白い話を（スマ村の人で）再現したのを書いてみました。

## ピットの逃亡

事の始まりは…

（30分前）

僕が帰ってくるとリビングでマルスがお昼寝中

そこで僕は寝ているマルスにイタズラをする事にした

ピット『（やっぱり寝ている人にイタズラをするなら落書きだよね）  
』

マルスが起きないように気をつけながら髭を書いたり、ほっぺには  
バーカ、アホ王子などいろいろ落書きをした

そして僕はマルスが起きないうちに自室に逃げ込んだ

（ピット逃亡まで5分前）

ピットが自室に逃げ込んでから30分がたとうとしていた

そこにロイが帰ってきた

ロイ『マルス、何その顔（笑）！？』

マルス『んあー。何？？』

ロイ『顔すごい事になってるよ（汗）』

マルス『えっ？本当？？』

ロイ『うん。鏡見てみたら!?!』

マルス、鏡でチェック

マルス『あー!。誰だ、僕の美しい顔に落書きしたのは…』

ロイ『とりあえず、顔洗えば!?!』

マルス『うん。そうする』

バシャバシャ

ロイ『とりあえず、僕達の他に家にいるのはピットとアイクだけだよ』

マルス『アイクはこんな事しないだろうからピットだな!?!』

マルスは怒りながらピットの部屋へと向かった

ロイもマルスの後を追った

マルス『ピット!?!よくも僕の美しい顔に落書きしたな(怒)』

ピットはマルスの怒号が聞こえたのか窓から飛び去った(ピットは一応天使なので飛べる)

くそしてピット逃亡く

マルスとロイがピットの部屋に着いた時にはそこは蛻もぬけの殻だった

マルス『チツ、逃げられたか。ロイ、ピットの捕獲を開始する』

ロイ『ええゝ。僕も協力しなきゃダメ??』

マルス『うん。これは王子命令だからね（笑）』

ロイ『うゝ。じゃあ、アイクにも手伝ってもらおう』

マルス『そうだね』

早速、2人はアイクの部屋に向かった

ガチャ

アイクは自室で丸まって寝ていた

その丸まって寝ている姿からはいつものアイクが想像できないほど  
無防備な姿だった

とりあえず2人はアイクを起こし協力要請をした

説明を聞いたアイクは快く引き受けた

続く



## ピットの逃亡(後書き)

この後は、ピットの逃亡中というお話を書こうと思います。



## ピット、逃亡中

自室から逃げ出したピットはとりあえずマリオ家に行く事にした

マリオ家に到着

ピンポーン、ピンポーン

ピーチ『はい。どなたですか？』

ピーチの声がインターホン越しに聞こえてきた

ピット『ピットです』

ピーチ『ちょっと待っててね』

ガチャ

ピーチ『どうぞ。入って』

ピット『はい』

入ってびっくりそこにはゼルダが…

ゼルダ『あら、ピットさん。どうされたんですか？』

ピット『あれ！？ゼルダがそこで何してるの？』

ゼルダ『ピーチとお茶ですわ』

ピット『そうなんだ。やっぱり僕帰るね（汗）』

ピーチ『帰っちゃうんですか!?!』

ピット『うん。また今度ね』

ピットは大急ぎでマリオ家から出た

ピット『（まさか、ゼルダがいるとは…。あのままだらマルスからゼルダへ連絡がいつて捕まるところだった）』

ピットがマリオ家を出た直後、ゼルダの携帯にマルスから電話が掛かってきた

プルルル、プルルル

ゼルダ『はい。もしもし?』

マルス『もしもし。ゼルダ?マルスだけどー』

ゼルダ『はい、ゼルダです。マルスさん、どうされたんですか?』

マルス『ゼルダさ、ピット見てない?』

ゼルダ『ピットさんならさっきまでマリオ家にいましたよ』

マルス『えっ、本当?』

ゼルダ『ええ』

マルス『ゼルダありがとう。じゃあ切るね』

ゼルダ『いえ、お役に立ててよかったですわ。では』

ブツ

ピットの予想が当たったようだ

ピットは今度はスネーク家に向かった

スネーク家に到着

ピンポーン、ピンポーン

ガチャ

すぐにトレーナが出てきた

トレーナ『ピット君!! 今日はお客が多いな!!』

ピット『お客? 僕の他に誰が来てるの?』

トレーナ『ファルコンさんとリュカだよ』

ピット『じゃあ、僕はいいや。またね』

トレーナ『えっ。あ、うん。またね』

ピットはスネーク家を後にした

ピットがスネークを後にした直後、ロイからトレーナへと電話が掛かってきた

）

トレーナ『（ロイ君から電話だ。なんだろう…）』

ピッ

トレーナ『はい。ロイ君、どうしたの？』

ロイ『トレーナさ、ピット見てない？』

トレーナ『ピット君？。ピット君ならさっきまで家にいたよ』

ロイ『マジで！？』

トレーナ『うん。すぐ、どっかいなくなちゃたけど』

ロイ『トレーナ、ありがとう。じゃあね』

トレーナ『あ、うん。じゃあね』

プッ

トレーナはピット君なんかやったのかな？と思いながら家に入っていた

その頃、マルス、ロイ、アイクの3人はというと…

ロイ『やっぱり、マリオ家とスネーク家に行ってたね。ピット』

アイク『ああ』

マルス『でも、みんなに連絡まわしといたから楽勝しょ』

そう。マルス達はみんなに電話をして、ピットを連絡するよう頼んでおいたのだ

く3人が電話した人く

・ウルフ

・エミー

・エスピオ

・サムス

・シャドウ

・ソニック

・ダークリンク

・トレーナ

・ファルコ

・フォクス

・リンク

・マリオ

・ルイーダ

・ベクター

・ルカリオ

・メタナイト

・デデデ

・ガノンドルフ

・マスター

・クレイジー  
・リン

ちなみにリンはアイクが電話した（電話したというかマルスに電話させられた）

未だにピットは逃亡中

続く

一件落着！？

みんなに連絡されて逃げ場を失ったピット

学校に避難しようとしたが、途中の公園でサッカーをしていたダイクリンク、カービィ、ネス、ピカチュウ、ピチュー、リオル、クッパジャー、に見つかりその場を逃げ出した

今度は何気無く歩いていると、買い物途中だった、リンク、お母さん（サムス）に遭遇した

僕はリンクがマルスに連絡する前にその場を離れた

お母さんが、何か言っていたようだったが僕はそれを無視して走り続けた

いっぱい走った僕は、いつの間にか森に入っていた

ピット『（僕、いつの間にか森に入っちゃんだ…。これから僕、どうしよう…）』

と不安になってしまったピット

とその時

カサカサ

ピット『（今の音なんだろう…）』

ガサ

そこに現れたのは赤いピクミンだった

ピット『（何だピクミンだったのか…良かった）』

僕が安堵の表情を浮かべているとその赤いピクミンが『ミーミー』と鳴いて擦り寄ってきた

ピット『どうしたの？？』

と聞くとその赤ピクミンは僕の服を引っ張りながらどこかを指差していた

僕はその赤ピクミンの指差す方へ行くことにした

ピクミンの指差すところに行くところには…

青いピクミン、黄色いピクミン、紫のピクミン、白いピクミンがいっぱいいて中心にはオリマーさんとG&amp;P・Wがいてみんな一生懸命ピクミンを探していた

ピクミン達『ミーミー、ミー（赤ピクミン、どこだー？）』

オリマー『赤ピクミン。どこに行っただんですか？出てきてください』

G&amp;P・W『ピクミン。ドコ、イッタデスカ？デテ、キテ下さい』

それを聞いた僕は赤ピクミンを連れて行くことにした



『赤ピクミン、おいで〜』と僕が言うとピクミンは『ミー』と鳴きながら近づいてきた

ピクミンを抱きかかえた僕はオリマーさん達の元へ

ピット『あゝ、オリマーさん』

僕が、呼ぶとオリマーさんは振り向き『あっ』という声を漏らし驚いていた

オリマーさんは驚いていたが、すぐに笑顔になった

オリマー『ピットくん、ピクミンを助けてくれたんですね。ありがとうございます』

G & a m p : w 『ピットくん、アリガトウ、ゴザイマス』

ピット『いえ、別に僕はたいした事してないよ（照）』

G & a m p : w 『オリマーサン。ピットクンをイエにショウタイシテハ？』

オリマー『そうだね。ピットくん、我々の家に来てくれるかい？』

ピット『はい。ぜひ』

G & a m p : W 『デハ、イキマショウ！』

そして僕はオリマーさんの家に行く事になった

（5分後）

オリマー『ここだよ。ピットくん』

ピット『わぁー！！すごい、ツリーハウスだ』

G & a m p : W『ドウゾ、ハイッテ下さい』

僕は初めてオリマーさんの家に入った

オリマー『どうぞ、座ってください』

ピット『はい』

僕はソファーにゆっくりと腰を掛けた

中はきれいで温かみのある洋風の部屋だった

オリマー『ところでピットくん。なぜあんな所にいたんだい？』

ピット『ちょっと、マルスにイタズラしたら…』

オリマー『イタズラしたら…？』

G & a m p : W『コウチャガ、ハイリマシタヨー！』

と言ってG & a m p : Wが紅茶とケーキが乗ったおぼんを持ってきてくれた

ピット『G & a m p・Wありがとつ。わぁー、美味しそう!~!』

オリマー『実はそのケーキG & a m p・Wさんが作ったんですよ!~!』

ピット『そうなんだぁー!~!リンクみたい』

僕は早速一口食べた

ピット『美味しい!~!~!』

ピクミン達『ミー、ミーミー!~!（僕達も、手伝ったんだよ!~!）』

ピット『そうなんだ。ピクミン達、えらいね』

普通、ピクミンの言葉は分からないがこの話では分かる

さっき助けた赤ピクミンは『ミ、ミー』と鳴きながら僕に近づいてきた

赤ピクミンは甘えたいのか僕に擦り寄ってきた

僕が赤ピクミンの頭を撫でたら、赤ピクミンは嬉しそうに『ミミミ』と鳴いた

オリマー『赤ピクミンに好かれてしまったようですね。ところで、ピットくんどうしてあそこにいたんですか?』

ピット『マルスにイタズラしたら、マルスがめっちゃ怒ってみんなに連絡されて、それで逃げてきた』

オリマー『そうだったんですか…』

ピット『僕、どうすればいい?…』

オリマー『素直に謝れば、きっと許してくれますよ』

ピット『そうかな…でも…』

オリマー『我々も一緒に行きましょうか?』

ピット『えっ、いいの?』

オリマー『ええ。その子を助けてくれたお礼です』

G & a m p ; W『ケーキヲ、モッテイツテハ、ドウデスカ?』

オリマー『良いですね。ケーキならいっぱいありますしね』

ピット『ケーキもいいの?』

オリマー『ええ。もちろんですよ』

僕達はケーキを選んでから家に向かった

（１０分後）

ピット『ただいま…』

ピットの声をいち早く聞いたマルスが『ピット』と叫びながら玄関に走ってきた

ピット『オリマーさん、G & a m p ; W、ピクミン達どうぞ入って下さい』

オリマー『おじゃまします』G & a m p ; W『オジヤマシマス』ピクミン達『ミーマー』

ピット『マルス…ごめんなさい…』

マルス『えっ、（謝ってくると思わなかった…）もういいよ…次からはするなよ』

G & a m p ; W『コレ。ケーキーデス。ドウゾ』

いつの間にかみんな玄関に集まっていた

サムス『どうぞ、あがってください』

オリマー『はい。では、お言葉に甘えて』

こんな感じでひとまず解決したのであった

終わり。

おまけ

その後、オリマー達はピクミン達がファルコン家のチビッコと仲良くなったのでファルコン家に泊まった

サボりは後が怖い…

ただいま外国語（英語）の授業中

外国語学科の教師はスネーク

スネーク『This flower is beautiful.  
この英文をリンク訳してみろ』

リンク『はい。「この花は美しいです」』

スネーク『正解。さすがリンク』

ゼルダ『素敵ですわリンク…』

リンク『ありがとう／＼／』

この一部始終を見ていたダークがリンクを睨んでいた

スネーク『じゃあ。本文読むぞ』

『That flower is also beautiful.  
このalsoの意味をリンク分かるか？』とスネークは黒板を書きながら聞いた

リン『えっとー……』

リンが困っていると前の席からノートを契られたような紙がまわっ

てきた

前の席はアイクだった

紙を開いてみると「もまた」と書いてあった

スネーク『分からないか？』

リン『もまたです』

スネーク『正解だ』

リン『ありがとうアイク／＼／』

アイクは『いや…別に』と言って前を向いた

2人のやり取りを見ていたマルスとロイが『ラブラブ』と言って  
茶化してきた

アイクは無表情のまま

リンは照れて俯いている

スネーク『ところで、リンの後ろの席は誰だ？』

リン『ウルフです』

スネーク『ウルフはどうした？』

ファルコ『アイツの事だからサボリじゃね！？』

スネーク『あの、バカ息子（怒）』

その頃ウルフは…ファルコの言った通りサボっていた

ウルフは屋上で寝ていた

ウルフ『んあー。良く寝たぜ』

ウルフが起きたときにチャイムが鳴った

次の授業は生物

ウルフは生物の授業もサボり

その後もウルフは全ての授業サボった結果マスターに呼び出しされた

マスターに呼び出しされたウルフは校長室に向かった

マスター『来ましたね…ウルフ君』

ウルフ『あ、はい…』

マスター『なぜ、呼ばれたかわかりますか？』

ウルフ『……？』

マスター『サボったからですよ』

ウルフ『あ、はい…』



マスター『なぜ、サボったんですか？』

ウルフ『…授業が面倒くさかったから…』

マスター『面倒くさかったですか…』

ウルフ『……』

マスター『貴方は学校に遊びに来ているんですか？』

ウルフ『いいえ…』

マスターは『じゃあサボるなよ！次サボったら…どうなるか分かり  
ますよね』とニコツと微笑みながら指をポキポキ鳴らしながら言った

ウルフに悪寒が走った

ウルフ『は、はい』

一応、これでマスターのお説教は終わり帰ったウルフ

終わり。

おまけ

家に帰ってからウルフはスネークにもこつ酷くお説教されたりし  
い…



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2835w/>

---

私立スマ村学園

2011年11月24日21時02分発行